

(様式1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	南丹市立園部第二小学校							校長名	小川 ちあき
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	207 名
学級数	1	1	2	1	2	1	3		
事業担当教員名	吉田 直晃								
① 中学校区で目指す子ども像	人とのつながりを大切にし、主体的に生きる子どもを育成しよう ～ 保幼小中が一体となって取り組む非認知能力の育成を目指して ～								
② 目指す子ども像	・ 人とのつながりを大切にする子 ・ 主体的に学ぼうとする子 ・ 自らの考えをもち、表現する子 ・ 協働的に学びを深める子								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・ 目標が明確であればあるほど、前向きに一生懸命頑張れる児童が多い。 ・ ペア学習やグループ学習では、盛んに話ができるが、全体での話し合いの場面では、自分の思いや考えを伝えることができない児童が多い。また、発言する児童に偏りがある。 ・ 集団の中で課題を解決していくことに弱さが見られ、話し合いの中で出た意見をまとめたり、話し合いの中でより深い学びにつなげたりしにくい。また、解決困難な課題に対して、粘り強く関わり、互いが関わりながら解決しようとする動きになりにくい。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	【仮説１】子どもの主体性を引き出せる授業の実現 焦点化された課題を提示し、児童から問いを引き出すことで、学習課題を自分事として捉えさせ、児童自身が「知りたい」「学びたい」と意欲をもって学ぶ授業展開を仕組む。そうすることで、その結果、様々な課題に対して主体的に解決しようとする児童の学ぶ姿勢の高まりを生み出せるのではないかな。 【仮説２】重点項目「チャレンジ精神の涵養」（非認知能力の育成） 様々な行事や取組では、折に触れて、自分の目指す姿を目標に設定したり、振り返りの時間を設定したりして、成功だけでなく、挑戦そのものを肯定的に評価していく。そうすることで、自分に自信をもち、「やってみよう」という意欲が向上するのではないかな。また、仲間とも進んで学び、主体的に課題に向かおうとする児童の育成につながるのではないかな。 【仮説３】個別最適な学び、個に応じた学びの実践 ICT 機器や「AI ドリル」を生かした授業実践力の向上を図る。個々の実態に応じて、ICT 機器を使った授業展開を工夫したり、AI ドリルを活用して、児童の学力実態に応じた問題に取り組ませたりするなど、授業や家庭学習の中で「個別最適な学び」の在り方を工夫することが児童の学力向上につながるのではないかな。								

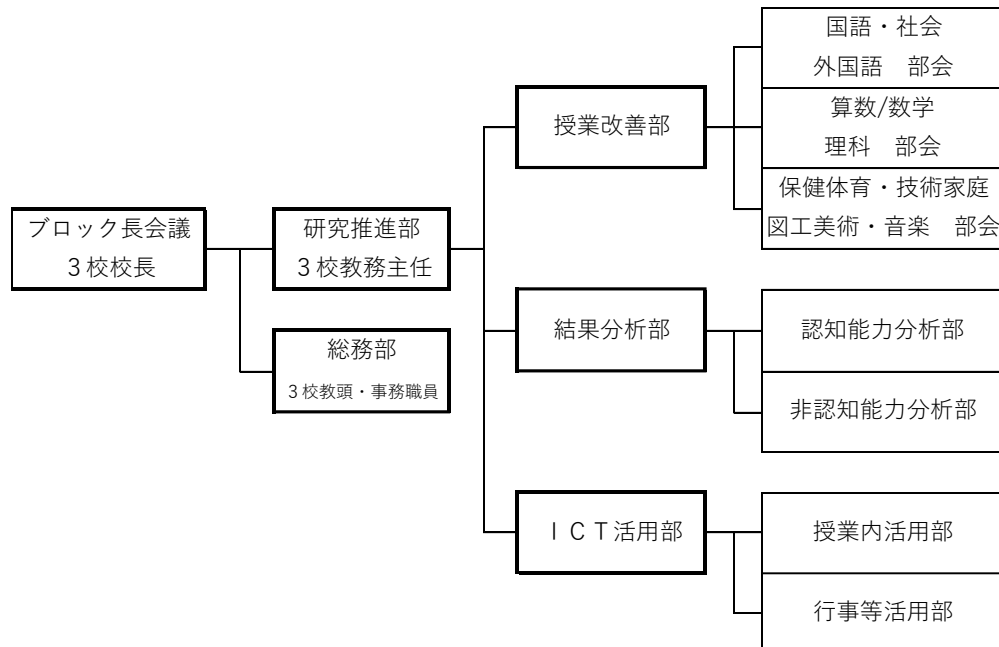
令和7年5月1日現在

【 1 研究主題】

他者とのつながりを大切にしながら、主体的に学習に取り組む児童の育成

【 2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【 3 具体的な取組内容】

園部中学校ブロックとしての取組

- (1) ブロックで統一の重点目標を設け、その変容を学びのパスポートを活用し、分析する。
- (2) 分析結果を基に、ブロック全体での授業改善の方向性を共有し、各授業改善の具体的な取組につなげる。
- (3) 各校で取り組んでいる独自の研究を交流し合い、より効果的な取組となるように系統的な整理を行う。例えば、探究的な学習において、小学校で行う地域学習などの様々な取組の中に探究的な要素を取り入れ、それらを中学校で行う課題解決型学習を行う素地として、中学校での取組につながるようにする。
- (4) 個別最適な学びと協働的な学び、認知能力と非認知能力等、どちらかを育成するのではなく、バランス良く育成できるように意識的に計画していく。

園部第二小学校における取組

(1) 複数指導

算数科や国語科といった主要教科の学習に、担外教員や支援員が入ることで、複数体制の指導をする。配慮の必要な児童や課題のある児童に対して、一人一人に関わりながら丁寧な指導ができるようにしていく。

(2) 校内研究

本校の研究を国語科として設定する。研究で学び合ってきたことをベースにして、他教科、領域の授業力向上につなげる。また、研究を軸にして、横断的な取り組みにも力を入れ、認知能力と非認知能力の双方の向上を目指す。指導案の中に、非認知能力向上に向けた手立てを記入していく。

(3) 学力向上に向けた取組

年度初めの4月に、校内基礎学力テスト（独自作成）を実施し、早い段階で新しく担任する学級の学力実態を把握できるようにする。また、学びのパスポートの結果分析を全職員で行い、児童の学力実態を経年分析できるようにしたり、課題の見られる児童に対し、その背景を分析した上で具体的な指導・支援の目標や方法を明確にしたりする。また、授業研究会など定期的にその成長の過程をみていく機会をもつ。

(4) 本校として伸ばしたい非認知能力を明確にし、児童にも行事や特別活動、日々の学習でその力を伝えていく。また、その力をどのように伸ばすのかを児童にも考えさせることで、児童自身が非認知能力を認識できるような取組を積極的に行う。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4 5 6	54	なにごとにもまずはやってみようと思うほうだ。	チャレンジ精神	
4 5 6	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。	学びに対する積極性	
4 5 6	47	思ったことは実現したい。	目標に向けて取り組む態度	

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

C層D層児童に向けて

4年

- ・漢字の読み書きの再徹底（丁寧に書かせる。読み仮名を書かせる。）
- ・話す・聞く時間の充実を行う。（朝のスピーチ活動で原稿を書かせる。）
- ・課題内容の把握を丁寧にさせる。（問題の内容が十分に理解できた状態で学習をはじめさせる。図や絵に描いて理解させる、具体物を操作させて、理解を助ける。）
- ・九九や基礎となる計算力の定着。

5年

- ・話す機会を意図的に増やす。アウトプットを重ねる。
- ・一度であきらめず、問題を何度も読ませ、題意を理解させる。達成感を体験させる。
- ・短い文章の問題に取り組み、問題を読み解く経験をスモールステップで積み重ねる。
- ・音読を丁寧にさせ切る。すぐに出来る課題を提示し、学習への抵抗感をなくす。
- ・題意の読み取り・理解を支援に入ってもらいながら取り組ませる。

6年

- ・題意の理解を丁寧にさせる。関わる。支援を入れての指導を行う。（算数科の複数指導）
- ・図や絵を描かせる。
- ・発展問題に注力させるのではなく、まずは基礎基本問題の定着をねらいとして、課題に取り組ませる。

集団としての具体的な指導・支援方法

4年

- ・音読トレーニング 日々の宿題をさせ切ることと、出す課題の工夫（短文を読ませる。全文ではなく、段落で課題にさせるなど）
- ・宿題に九九音読を入れる。
- ・1年間の学習のまとめ時間を設定する。（算数科を中心に、時計、重さ、わり算、巻き尺）
- ・習熟度別授業の実施。（算数科）

5年

- ・文章問題慣れを行う。国語の5分読み取り課題を年間通して取り組ませる。
- ・1年間の学習のまとめ時間を設定する。（算数科と国語科を中心に行う。）
- ・音読トレーニングをさせる。（短文を読ませる。全文ではなく、段落で課題にさせるなど）
- ・算数科を中学校の数学科の教師とともに指導する。（週1回）

6年

- ・基礎基本を理解しやすい授業づくり。（視覚支援を行う。具体物の提示等）
- ・反復練習の時間、既習事項
- ・算数科を中学校の数学科の教師とともに指導する。（週1回）

全体

- ・朝学習（10分）に週に1度AIドリルに取り組ませ、学習の習熟と、AIドリルへの関心を高める時間を取り入れる。
- ・文章問題慣れを行う。国語の5分読み取り課題を年間通して取り組ませる。

【8 仮説の修正】

【9 具体的な取組内容の修正】

- ・校内研究の指導案に、非認知能力向上のための取組についての項目を設け、授業の中での実践内容を記載し、取り組んでいる。
- ・チャレンジ精神の涵養に向けて、具体的にワークシートを活用した。行事を中心に目標設定と、新しくチャレンジしたい内容を書き出し、取り組ませた。また、振り返りも行い、PDCAのサイクルを意識させる手立てを入れた。
- ・放課後に、4年と6年で取り出し指導【国語科と算数科】（学年5名程度）を行った。（週1時間 複数体制で指導）

【10 児童の変容（普段の様子から）】

- ・学習に向かう姿勢が変わってきた。意欲が向上し、達成感が得られる機会が増えている。
- ・読み取り問題の成果は得られている。課題の取り組み方（必ず問題文を読む。問題を見る。キーワードを探す 等）を繰り返し指導してきたことで、問題への取り組み方は定着してきている。
- ・復習を丁寧にしてきたことで、1年間の学習の定着はできている。
- ・チャレンジ精神の涵養に取り組んできたことで、多くの児童が達成感を得ることができていた。ワークシートを活用し、文章に残してきたことで、その頑張ってきた成果を再確認する機会ももてた。
- ・話し合い活動では、積極的に意見交流できる児童が増えている。

【11 3年次の研究構想】

- ・非認知能力と認知能力の相関が見られる項目について、重点的に取り組んでいく必要がある。
- ・学びのパスポートで実施した質問調査では低学年の調査がとれない。重点項目でもいいので低学年版の質問調査を作成し、年間通して調べていく。
- ・非認知能力の向上に向けた取組に関しては研究部と連携・行事と連携した取組を進めてきた。さらに効果を高めるためには、普段の授業の中にも非認知能力向上の授業を取り入れていく必要がある。学級経営とも連携をしていく必要がある。児童からの評価をその都度担任に返し、次の取組に活かす。
- ・府の指導を受け、学びのパスポートから得られる「個で見取る視点」を学力向上の取組に生かしていく。評価対象を学力層ごとに選び、その児童を対象に向上させていく取組を各学級で実践する。その実践の成果を各学級の質問紙から成長をみていきたい。